

いかも知れない。そういう点で、その資本的規模も、いきおい大ならざるを得ないであろう。ここに外資導入の必要と困難とが、たがいに矛盾するものとして、登場するのである。

いずれにしても国内資本が貧弱であり、外資を求める必然性が増大し、すぐれて近代的な経営が、ともかくにも取り入れられる場合にも、社会機構としては、アヴィアードは、それが後進的であることをそのままに、この先進的な経営に結びつかざるを得ないであろう。かようにして、アマゾンニアにあつては、一等車と四等車とは依然連結しつつ、経済開発という新しい軌道を、当分の間は走ることであろう。そういう点に、後進地域開発の一般性と特殊性とが、考察できるのである。

付記、本稿については、泉・斎藤両氏著「アマゾン」に負うところが多し(本誌第二十四号参照)。

書評

岡部寛之著 「保険学新講」

西 藤 雅 夫

ここ数年の間に公にされた保険学の論著は、決して少しとしない。それらの中にあつて、岡部寛之博士の近著「保険学新講」(昭

和三十一年三月、保険研究社、二四四頁)は、特異の立場に立ち、特異の体系を持つ点で、きわめて注目すべき著作である。本書が触れているいくつかの問題は、従来の保険学から見れば、たしかに新しい課題を提供したものと見ることができよう。そこで私は、そのうちの一、二を紹介して、その方面から、本書の特色を明かにしたいと思う。

まず著者は、本書の序言に於て次のように述べている。「……説きまたり展開する理論は、これごとく従来の保険学説と全く異つた新たな説である。而もその場合、著者の理論的立場はいうまでもなく『資本論』の正当さに立脚して如何に保険を把握するかであり、そして一応経済学的にとりあぐべき、保険をめぐる諸問題についてはすべて取りあげて検討を試みたのであるが、その展開の過程に於て従来の保険論との懸隔を明かにするために必要な限りこれが批判を加え、然る後に自説を展開することとした……。」……それはやもすれば顕微鏡的詮索にのみ終始している従来の学問に對する研究態度を脱却して、たとえ、大雑把でもよい、荒削りでもよいから、ともかく体系的、有機的な学説を打建てる、その上で室内裝飾をほどこすべきであるという著者の考え方に依拠するものである……」。

これによつて窺えるように、著者は、野心的な態度で、従来の保険学に挑み、そういう理論の展開のうちに、おのずから一つの体系が組立てられている。その意味では、清新の風を吹き入れた、ということが出来る。しかし、そうであるからとて、この体系が、理論

的に充分に整つていていい得るであろうか。いま私の紹介が、この点に触れるところがあるとしても、もとよりその故を以て、本書の価値が減ぜられると見るべきでない。

二

いま本書は、理論保険学、保険史、保険政策の三篇から成つていゝ。そして、その大部分は理論保険学によつて占められ、十四の章に及び、著者の保険理論の中心をなしている。これに對して後の二者には、僅かに三つの章が与えられるに過ぎない。

この理論保険学は、序論のほか、保険学方法論、保険の分類、保険の概念、保険の基礎としての信用制度一般、保険資本の本質、保険労働の本質、保険利潤の本質、経済準備説批判、保険の資本主義的役割、保険と社会的予備、保険と価値論、保険資本の集中集積、保険と景気変動の各項目にわたつてゐる。

そこで著者に於ては、保険の本質について、次のような定義が与えられる。すなわち、「保険とは信用制度一般の基礎の上にたつて、偶然の事故の場合に危険を負担するを内容とする信用という商品組織し、実現させるところの特殊の資本主義的企業である。」(三七頁)したがつて、著者によれば、保険の基礎は信用制度であるが、資本主義経済に於ける信用の意義や役割や、それと保険との関連性を明かにすることが、まさしく保険学の課題なのである。

このような考察は、もともと保険学が、第一には「従来社会経済から遊離した、個体として把握された保険を、社会経済—資本主義

経済との関連性に於て把握する」ものであり、第二には、「斯くて把握された保険を如何にすれば、現実の分析に近づけ、適用することが出来るかを検討する」(三七頁)ものである、という著者の見解に基くのであるが、このようにして著者は、第一の点について、すなわち従来社会経済より遊離、抽出され、個体として把握されて来た保険を一切否定して、もつぱら資本主義経済そのものとの関連から、保険の本質を明かにしようとしてせられる。

そういう見解は、保険学が経済学である限り、著者をまつまでもなく、きわめて当然のことである。問題は、あたかもその資本主義経済そのものが、どのような本質を具えているか、ということであり、それへの経済的な関連が、如何なる機構を持つかという点にある。それを著者は、信用たるところの商品として、考察せられるのである。

三

著者によれば、「信用は所有としての資本と機能資本との間の關係を表現する」(四九頁)のであり、それは、「資本主義的生産様式の内在的な形態である。」(五〇頁)ところで、「資本主義社会の一層高度の発展段階に於ては銀行信用の占める地位役割はますます決定的となり、他方商業信用はその純粹な姿で現れることは益々少くなり、銀行信用によつて複雑化されることが多くなるのである」(五六頁)が、「それは両々相俟つて一つの統一をなしている。」(五七頁)

さて著者に於ては、保険の資本は、もともと貸付資本＝銀行資本と異なるものとして理解される。すなわち、「それは本質的に商業資本に属する。」(六八頁)そして、このことは、保険資本が、貨幣取引資本として把握せられるからである(六九頁)。

この点について、著者は次のように述べられる。すなわち、「……保険資本の本質は、貸付資本ではなくして、それは商業資本として、その中の貨幣取引に属する事を明かにしたのである。実は資本主義社会に於て金融とは、外ならぬこの貸付資本にのみ限定さるべきであるにもかかわらず、一般には貸付資本も、貨幣取引資本もが混同視され、おおよそ、貨幣を取扱う業務はすべてこれを金融機関であると看做されているかの如くである。……貨幣取引資本は形態的には貸付資本に密着しており、就中保険資本は形態的には貸付資本と同一のものとしてあらわれるかの如くであるが、それは貸付資本ではなくして、本質的には商業資本であり、貨幣取引資本である」と云う点に於て銀行とは根本的に相異しており純粋なる意味では金融機関ではない……」(七五―七六頁)。

この保険資本は、「資本主義的生産様式の派生的形態として、再生産過程の拡大化に影響するにすぎないもの」(一一九頁)として理解せられる。すなわち、保険資本の運動は

$$W(\text{商品}) - G(\text{貨幣}) \left\langle \begin{array}{l} W' \\ G' - G''(G' + \Delta G') \end{array} \right\rangle$$

として示すことができるが、この運動の可能性は、現実的資本の運動

$G - W \left\langle \begin{array}{l} P_m \\ A \dots W' - G' (G + \Delta G) \end{array} \right\rangle$
 によつて条件づけられる。」(一一九―一二〇頁)いいかえれば、保険の販売(実現)は資本の拡大再生産過程によつて条件づけられているわけである。

四

既に述べたように、著者によれば、保険は、信用という商品を組織する資本主義的企業である。「そこに於て保険は一応保険信用という商品として把握されているのであるが、実はこの点に問題が存在するのである。定義という一般的、概観的な考察の場合に於ては、一応商品として把握することは、保険の本質的な把握を別とすれば決定的外れでなく、むしろ一般人にとつて説明し易い表現であるということが出来るが、然し保険と「価値論」というより厳密な、より本質的把握をなすべき段階に於てはこの保険の商品性がまづ検討されなければならないのである。」(一三九頁)

この問題について著者は、保険を一種の仮装的商品として考察せられる。これに関して私は、既に論評を加えたのであるから(本誌、第二十九号、保険の本質とその商品性)、ここには触れない。ただ最近はいくも、同じマルクス経済学の立場から展開された庭田範秋氏の見解が、この商品性を正面から否定している(保険商品説の研究、三田学会雑誌、四八巻一〇号)のと対比して、興味あることといふべきである。

さて著者によれば、「保険資本は、社会的総再生産過程に於ける

総余剰価値よりの控除、占有であり、保険利潤は費用の節約という形で消極的のみあらわれるものであるから、保険利潤は一般利潤率の形成に参与し得ず、まさにその反対に与えられた一般利潤率が保険費用と保険資本として独立化せしめる……換言すれば保険に於ても、『商品が單純に諸商品として交換されるものではなく、余剰価値總量の中から自己の大小に比例した配当分を、即ち相等しい大きさに対しては等量の配当分を、要求する諸資本の諸生産物として交換せられるのである。』斯くして云うなれば、保険に於ては個別的価値の平均化としての市場価値よりもむしろ、それは市場価値一般としてあらわれるのである。」(一五二—一五三頁)

五

右に於て私は、本書の「理論保険学」の諸問題のうち、二、三をとりあげて紹介した。その他の諸問題も、すべてこれらに有機的に不可分に結びつくものとして理解せられる。いまその根底に流れるものは、いうまでもなく「資本論」に立脚する学説であつて、そこに、著者の野心的な企図が窺取できる。

この企図が、果して厳密な理論体系のもとに、達成せられたか否かは、読者それぞれの批判に委ねらるべきであらう。ただ本書が、何らかを示唆することは事実であるし、私もまた、ある点では同意しつつ、他面見解を異にすることを告白せざるを得ないのである。これについては、機会を改めたい。

本書に於ては、既に明かなように、従来保険が学として充分でな

かつたこの分野に、経済学としての保険学の地位を築こうという著者の意図から、いくつかの文献を駆使して、その理論が展開されている。ところで、これらの文献に於て、マルクスやヒルファディングがしばしば引用せられているのは、著者の立場の特色から考えて、まことに当然のことである。しかしながら、その反面に、その他の内外の文献に触れるところが、必ずしも多くはなく、ことに、外国の文献については、殆んどこれに触れるところがない。ややもの足りないのである。

もとより、理論の展開は、あくまで独自のものであるべきであり、その意味では、文献は常に重要であるというわけではなからう。しかしながら、いやしくも新しい理論は、古きそれらの理解批判から、慎重に出発しなければならぬのであるから、できるだけ多くを内外の学説に求めるといふことは、学問的態度として望ましい。このことは、従来わが国の学者がえてして陥つたような、外国への追従もしくは紹介の卑屈さを意味するものではない。

ただ、眞理追求への道は、きわめて多くの見解を虚心に聴くことの中に開かれる。本書を通しての、私の著者に対する理解は、もとより皮相であり、すぐれた業績に向つて非礼にわたることを怖れるが、そういう点にいま少し配慮がなされば、著者みずからが述べられているような顕微鏡的でない理論の体系が、一層みごとに打ち建てられるのではないか、と思われる。いずれにしても、伝統的保険理論に対して、本書が特異の地位を主張していることは事実である。(一九五六・四・一七)